３．回答結果と分析

（1）まとめと分析

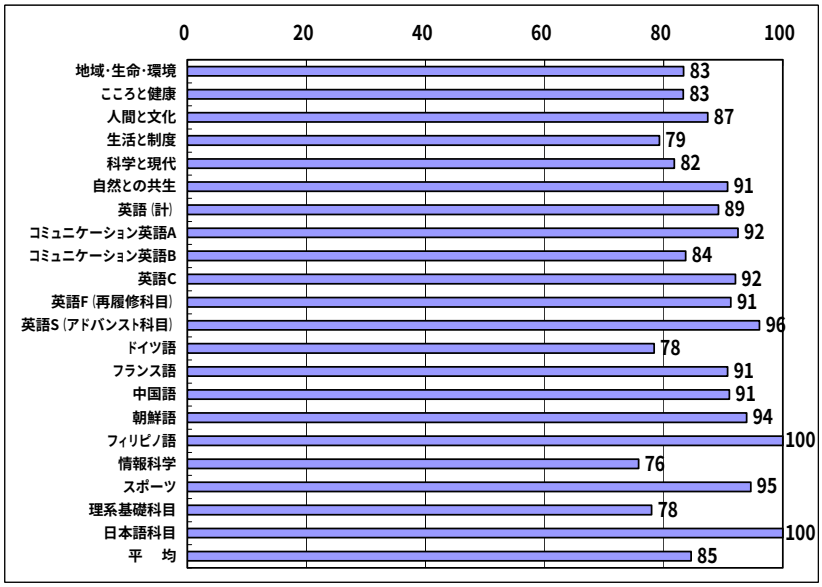
（2）以下に示される平成19年度前学期の集計結果について、設問ごとの分析を行った。各設問に対して肯定的な評価を行った学生の割合を算出し、科目別平均と全科目平均を示した。これらの数値から全体的な傾向及び各科目の特徴を把握し、今後の対策について提案を行った。尚、「英語」に関しては（計）の数値を分析の対象としている。

1）「授業の内容に関する質問」に対する学生の自己評価

まず「目的・目標の理解」であるが、全科目平均で85%の学生が肯定的評価を行っており、概ね学生は授業の目的・目標を理解できていると判断できる。「フィリピノ語」と「日本語科目」が100%、「スポーツ」が95%、「朝鮮語」が94%の高い肯定的評価を得ている。しかし「情報科学」はやや低い数値となっている。目的・目標を理解しないまま学習を継続すると学習効果は低くなるため、目的・目標を明示する取り組みが求められる。

表1　設問①1-1目的･目標の理解
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

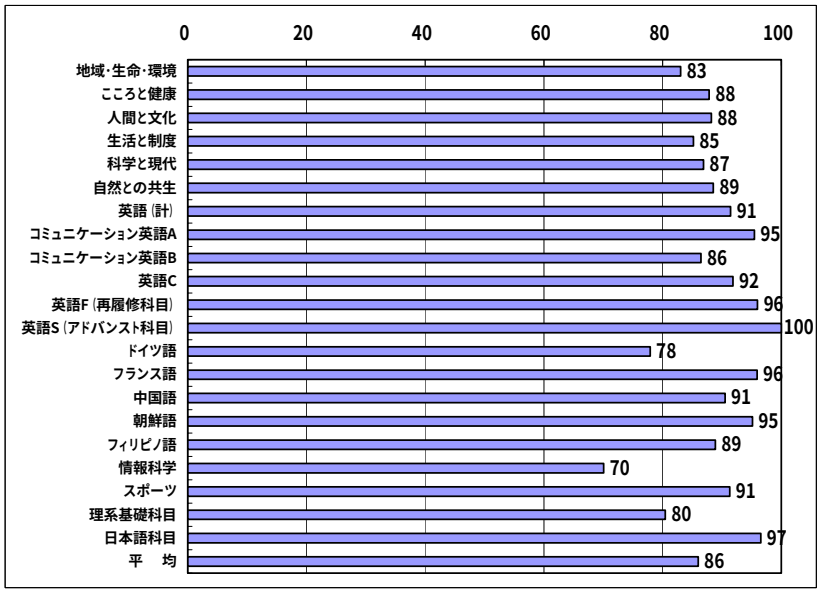
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	85		83
こころと健康	76		83
人間と文化	87	82	87
生活と制度	91	81	79
科学と現代	79	78	82
自然との共生	77	89	91
英語（計）	89	93	89
コミュニケーション英語A			92
コミュニケーション英語B			84
英語C			92
英語F（再履修科目）			91
英語S（アドバンスト科目）			96
ドイツ語	73	90	78
フランス語	92	98	91
中国語	87	92	91
朝鮮語	89	88	94
フィリピノ語	100	83	100
情報科学	81	100	76
スポーツ	96	94	95
理系基礎科目	76	82	78
日本語科目	100	100	100
平均	83	86	85



次に「進度・時間配分」の適切さであるが、全科目平均で86%の学生から肯定的評価を得た。また、ほとんどの科目で80%を上回る高い数値を得ている。一方「情報科学」が70%にとどまっているが、この科目は習熟度に格差が出やすいので、進度や時間配分を今一度検討する必要があろう。

表2　設問②1-2進度･時間配分
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

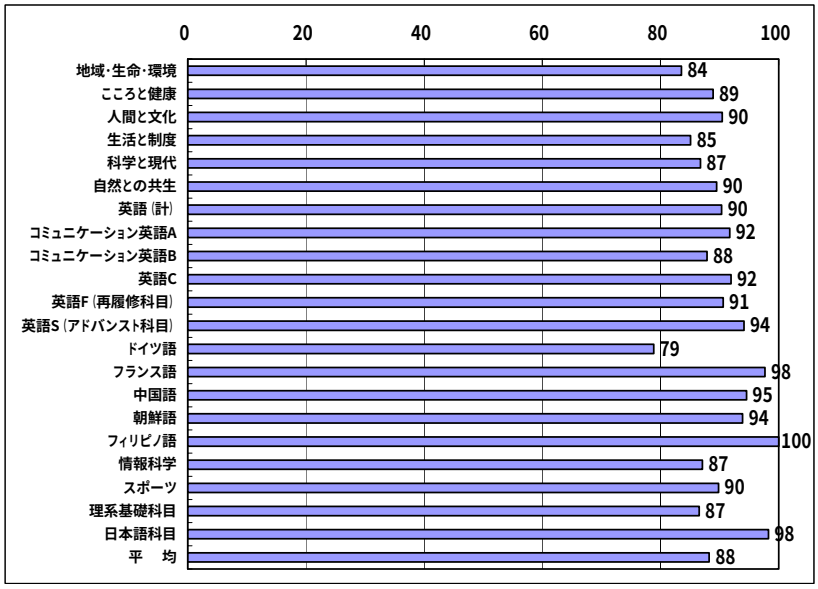
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	74		83
こころと健康	82		88
人間と文化	86	88	88
生活と制度	92	85	85
科学と現代	84	83	87
自然との共生	81	85	89
英語（計）	91	95	91
コミュニケーション英語A			95
コミュニケーション英語B			86
英語C			92
英語F（再履修科目）			96
英語S（アドバンスト科目）			100
ドイツ語	79	88	78
フランス語	86	95	96
中国語	84	91	91
朝鮮語	91	90	95
フィリピノ語	63	83	89
情報科学	74	100	70
スポーツ	93	92	91
理系基礎科目	79	81	80
日本語科目	94	100	97
平均	83	87	86



「シラバスどおりの授業」については、全科目平均で88%、科目別でも「ドイツ語」を除いて80%を上回る肯定的評価を得た。多くの学生が「シラバスにそって授業が実践されている」と感じていると言える。シラバスに書かれている内容は教員と学生との間の契約事項としての役割をもっている。今後もシラバスにそった授業を行っていくことが求められる。また、当初のシラバスとは異なる授業を行う場合にも、シラバスを変更した上で、学生に変更点や変更理由をきちんと説明することが重要である。

表3　設問③1-3　シラバスどおりの授業
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	88		84
こころと健康	88		89
人間と文化	91	87	90
生活と制度	92	86	85
科学と現代	84	84	87
自然との共生	86	86	90
英語（計）	90	94	90
コミュニケーション英語A			92
コミュニケーション英語B			88
英語C			92
英語F（再履修科目）			91
英語S（アドバンスト科目）			94
ドイツ語	77	90	79
フランス語	94	99	98
中国語	84	92	95
朝鮮語	94	84	94
フィリピノ語	63	100	100
情報科学	86	100	87
スポーツ	89	90	90
理系基礎科目	85	88	87
日本語科目	97	96	98
平均	87	88	88

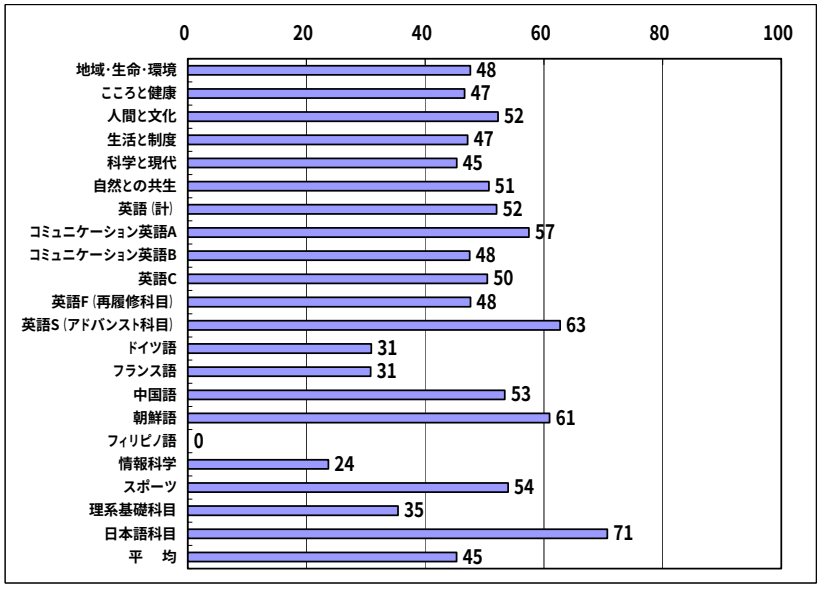


「レベル」については、選択肢が５択（他は４択）であるため、３番目の選択肢『ちょうどよい』の値を示した。全科目平均で45%しか肯定的な回答を得られておらず、半数以上の学生がレベルの適切さを感じていないということになる。数値の低い「ドイツ語」「フランス語」「情報科学」「理系基礎科目」については、その意味を解釈する、より深いデータ収集を行い、レベルの再設定などを検討すべきである。とりわけ評価の低い「情報科学」は至急検討が必要である。尚、「フィリピノ語」の評価が０%なのは、開講科目数や受講生数が少ないことが関係していると思われる。

この設問の評価が低くなる要因は、学生の学習履歴の多様化、大学での学習技術の未習得、学習ニーズ分析不足など複合的である。授業の検討のみならず、プレイスメントテストの実施による正確な学力把握や、未習・補習、学習相談窓口等の個別対応型学習支援サービスの提供もあわせて考える必要があろう。

表4　設問④1-4　レベル
（全回答数に対するC評価の割合（%））

	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	56		48
こころと健康	43		47
人間と文化	49	48	52
生活と制度	54	46	47
科学と現代	41	39	45
自然との共生	50	52	51
英語（計）	51	53	52
コミュニケーション英語A			57
コミュニケーション英語B			48
英語C			50
英語F（再履修科目）			48
英語S（アドバンスト科目）			63
ドイツ語	33	37	31
フランス語	34	37	31
中国語	49	46	53
朝鮮語	56	44	61
フィリピノ語	0	0	0
情報科学	39	0	24
スポーツ	60	55	54
理系基礎科目	35	31	35
日本語科目	54	64	71
平均	46	45	45

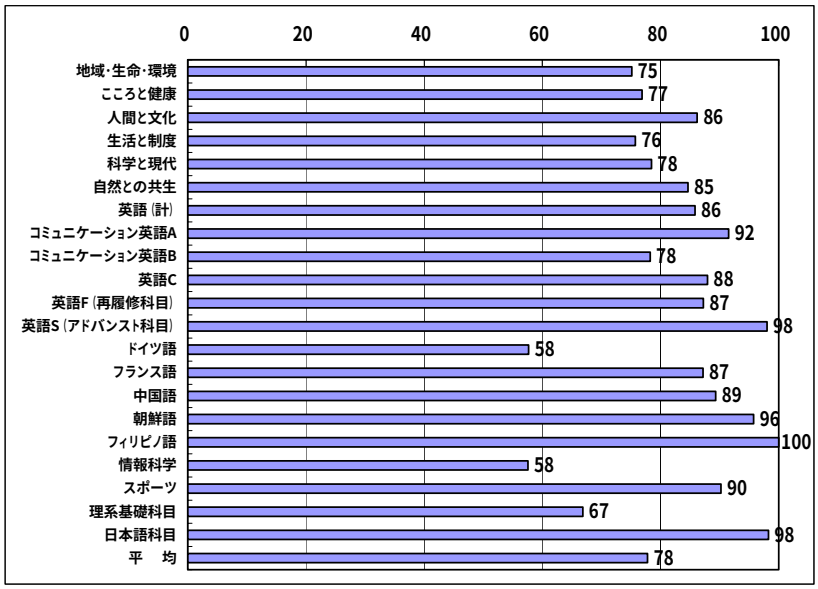


２）「授業担当者の授業方法に関する質問」に対する学生の評価

まず「わかりやすさ」についてであるが、全科目平均では78%の肯定的評価を得たものの、科目ごとにばらつきが見られる。「ドイツ語」「情報科学」「理系基礎科目」において数値が低くなっている。わかりやすさに影響を及ぼす要因は大きく２つあり、授業内容そのものの難易度が高い場合と、授業における教授方法（テクニック等）に起因する場合が考えられる。この３つの科目は「レベル」についても、低い評価を受けており、教授方法とあわせて見直しをする必要がある。

表5　設問⑤2-1　わかりやすさ
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

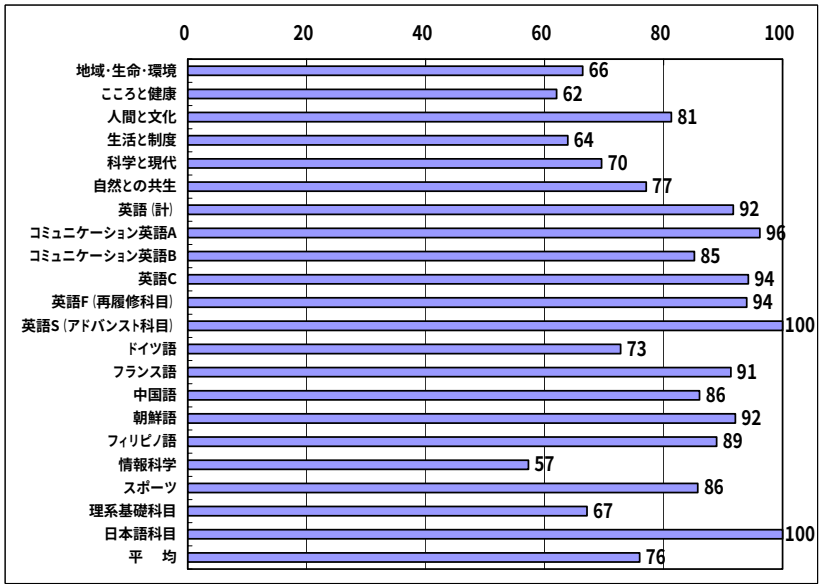
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	80		75
こころと健康	70		77
人間と文化	82	82	86
生活と制度	91	77	76
科学と現代	77	72	78
自然との共生	71	82	85
英語（計）	86	90	86
コミュニケーション英語A			92
コミュニケーション英語B			78
英語C			88
英語F（再履修科目）			87
英語S（アドバンスト科目）			98
ドイツ語	61	82	58
フランス語	80	95	87
中国語	80	84	89
朝鮮語	88	85	96
フィリピノ語	88	83	100
情報科学	65	100	58
スポーツ	92	94	90
理系基礎科目	65	69	67
日本語科目	97	100	98
平均	76	81	78



「コミュニケーション」は、教員と学生の間でコミュニケーションが図られているかを確認する指標であり、全科目平均では76%の肯定的評価を得た。科目別の結果を見ると「地域・生命・環境」「こころと健康」「生活と制度」「情報科学」「理系基礎科目」の数値が低くなっている。これらは、従来主に知識提供型の授業スタイルで行われてきた科目である。しかしながら、学生のコミュニケーション能力の向上が社会的に要請されている現状をふまえ、これらの科目においても、積極的に教員と学生の間でコミュニケーションを図っていくことが求められている。学生とのコミュニケーションの手法をＦＤ等で学習する必要があるだろう。

表6　設問⑥2-2　コミュニケーション
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

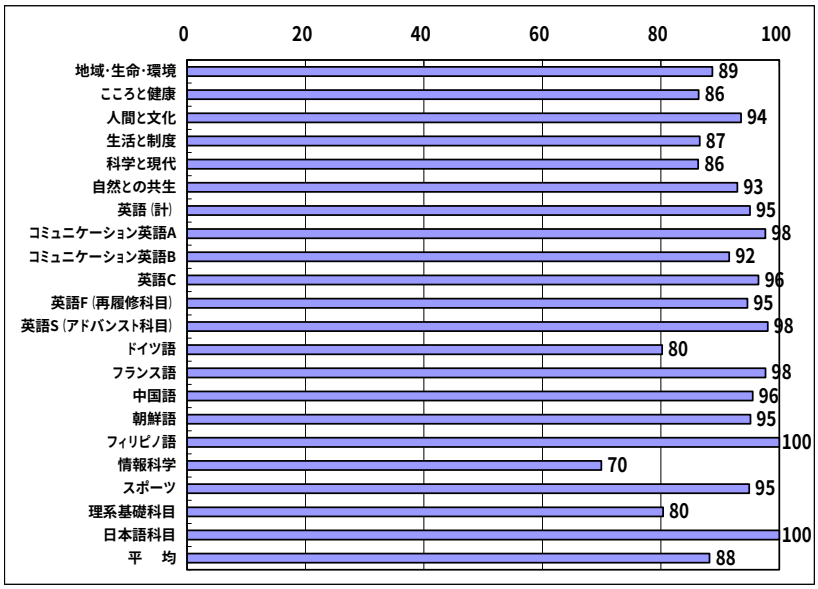
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	67		66
こころと健康	53		62
人間と文化	80	79	81
生活と制度	69	67	64
科学と現代	62	66	70
自然との共生	68	77	77
英語（計）	94	96	92
コミュニケーション英語A			96
コミュニケーション英語B			85
英語C			94
英語F（再履修科目）			94
英語S（アドバンスト科目）			100
ドイツ語	79	92	73
フランス語	88	95	91
中国語	77	86	86
朝鮮語	91	88	92
フィリピノ語	100	100	89
情報科学	57	100	57
スポーツ	85	87	86
理系基礎科目	68	68	67
日本語科目	94	98	100
平均	74	79	76



「教員の意欲・熱意」については、全科目平均の肯定的評価が88%であり、高い数値を得ている。教員の「熱意」は学生に伝わってこそ教育効果につながるものであり、この評価がさらに伸びるよう期待したい。「情報科学」はやや低調であり、部会での検討が必要であろう。

表7　設問⑦2-3　教員の意欲・熱意
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

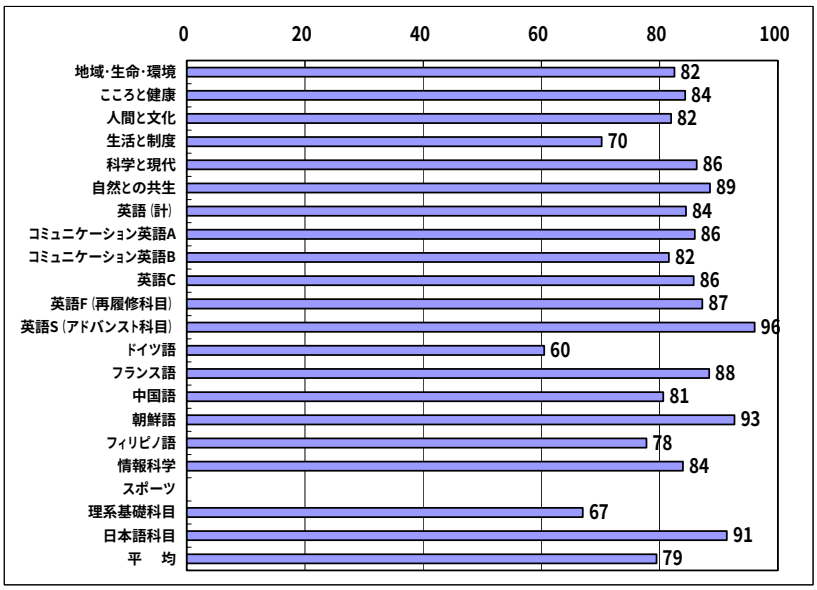
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	89		89
こころと健康	83		86
人間と文化	96	93	94
生活と制度	92	88	87
科学と現代	86	85	86
自然との共生	86	93	93
英語（計）	96	97	95
コミュニケーション英語A			98
コミュニケーション英語B			92
英語C			96
英語F（再履修科目）			95
英語S（アドバンスト科目）			98
ドイツ語	84	92	80
フランス語	91	98	98
中国語	90	93	96
朝鮮語	93	91	95
フィリピノ語	100	100	100
情報科学	72	100	70
スポーツ	96	95	95
理系基礎科目	79	82	80
日本語科目	100	100	100
平均	87	90	88



「視聴覚教材」は、学生の理解を促すため、教授手法としてビデオ・コンピュータ機材を効果的に利用していることを確認する指標であり、全科目平均では79%の肯定的評価を得た。科目特性により視聴覚教材の使用の意味に差異があるので、必ずしもこの数値が授業の質を表現するものとはならないが、学生の理解を促す有効な教材であることには間違いないので、積極的に使用すべきであろう。

表8　設問⑧2-4　視聴覚教材
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

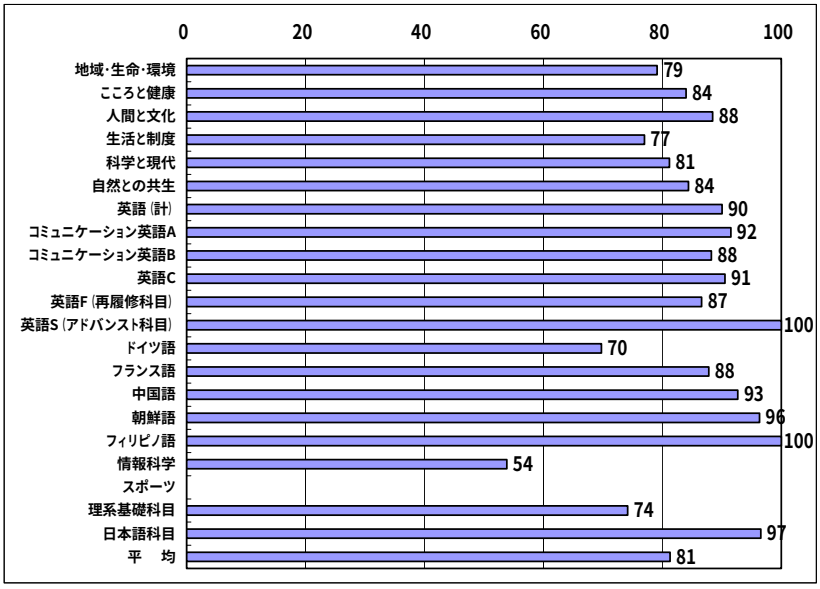
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	87		82
こころと健康	80		84
人間と文化	84	85	82
生活と制度	85	74	70
科学と現代	79	83	86
自然との共生	82	90	89
英語（計）	84	88	84
コミュニケーション英語A			86
コミュニケーション英語B			82
英語C			86
英語F（再履修科目）			87
英語S（アドバンスト科目）			96
ドイツ語	58	70	60
フランス語	77	90	88
中国語	70	81	81
朝鮮語	91	87	93
フィリピノ語	50	83	78
情報科学	85	100	84
スポーツ			
理系基礎科目	65	68	67
日本語科目	100	89	91
平均	77	80	79



「教科書・プリント」については、全科目平均の肯定的評価が81%であった。概ね効果的に使用されていると判断できる。「ドイツ語」「情報科学」「理系基礎科目」については若干低い数値となっているので、教材について検討する必要があろう。

表9　設問⑨2-5　教科書・プリント
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	77		79
こころと健康	79		84
人間と文化	86	82	88
生活と制度	87	78	77
科学と現代	74	78	81
自然との共生	77	82	84
英語（計）	91	94	90
コミュニケーション英語A			92
コミュニケーション英語B			88
英語C			91
英語F（再履修科目）			87
英語S（アドバンスト科目）			100
ドイツ語	66	77	70
フランス語	78	90	88
中国語	87	92	93
朝鮮語	96	92	96
フィリピノ語	88	83	100
情報科学	64	100	54
スポーツ			
理系基礎科目	72	74	74
日本語科目	97	96	97
平均	79	82	81

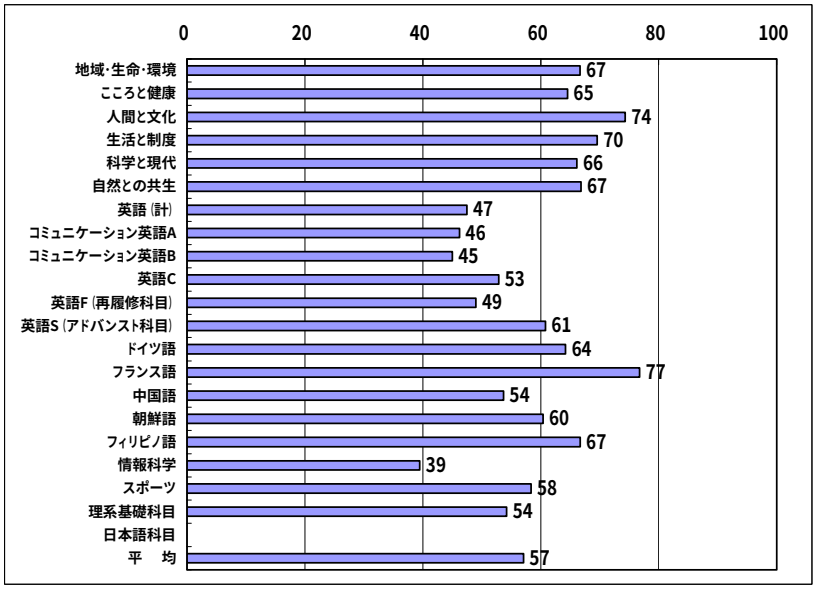


3）「あなた自身に関する質問」に関する学生の自己評価

「シラバス」については、全科目平均の肯定的評価が57%であった。裏返せば、約4割強の学生がシラバスをほとんど読まずに授業に参加しているということになる。シラバスを読み学習内容を大まかにつかむことは、学習効果を高めることに繋がる。シラバスの活用方法をガイダンス等で周知したい。

表10　設問⑩3-1　シラバス
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

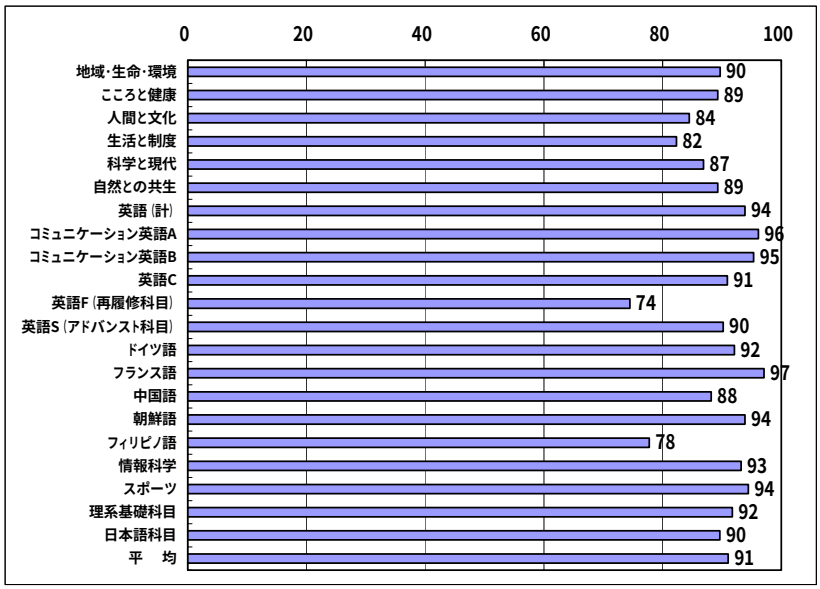
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	67		67
こころと健康	68		65
人間と文化	74	69	74
生活と制度	66	68	70
科学と現代	67	69	66
自然との共生	63	69	67
英語（計）	48	48	47
コミュニケーション英語A			46
コミュニケーション英語B			45
英語C			53
英語F（再履修科目）			49
英語S（アドバンスト科目）			61
ドイツ語	67	74	64
フランス語	76	79	77
中国語	53	60	54
朝鮮語	64	61	60
フィリピノ語	63	33	67
情報科学	46	100	39
スポーツ	62	61	58
理系基礎科目	57	61	54
日本語科目			
平均	59	62	57



「出席状況」については、『全部出席』または『１－２回欠席』と回答した学生の割合を示した。この割合は、全科目平均で91%に達している。また、科目別の結果を見ても、半数以上の科目で90%以上の高い数値となっている。学生の出席状況は概ね良いと言える。単位の認定の前提条件として３分の２以上の出席が求められていることから、これらに対する取り組みの成果と判断できよう。

表11　設問⑪3-2　出席状況
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

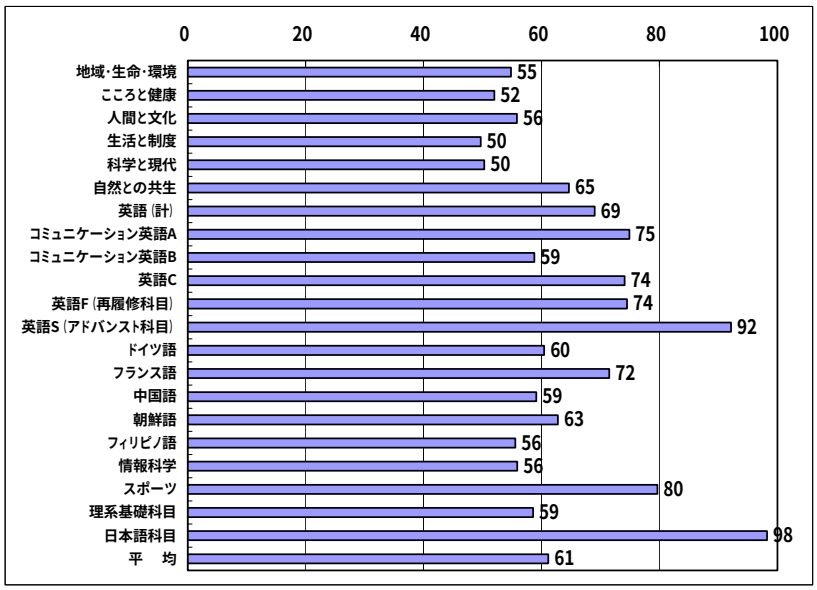
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	86		90
こころと健康	87		89
人間と文化	90	87	84
生活と制度	86	88	82
科学と現代	89	85	87
自然との共生	90	88	89
英語（計）	93	94	94
コミュニケーション英語A			96
コミュニケーション英語B			95
英語C			91
英語F（再履修科目）			74
英語S（アドバンスト科目）			90
ドイツ語	93	94	92
フランス語	96	95	97
中国語	90	84	88
朝鮮語	90	91	94
フィリピノ語	100	100	78
情報科学	91	100	93
スポーツ	95	96	94
理系基礎科目	91	89	92
日本語科目	94	100	90
平均	91	90	91



「学習態度」については、全科目平均の肯定的評価が61%であった。特に「生活と制度」「科学と現代」で低い数値となっている。「授業に積極的に取り組んだ」と考えている学生が多いとは言えない状況である。学生にのみ原因を求めず、授業の中で学生の動機付けを高めるための工夫をしていくことが重要であろう。

表12　設問⑫3-3　学習態度
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

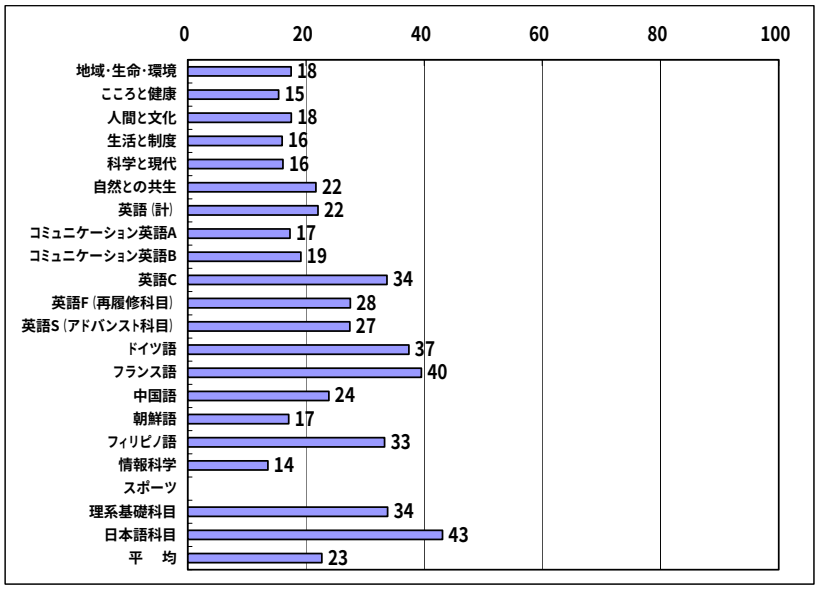
	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	51		55
こころと健康	43		52
人間と文化	59	59	56
生活と制度	51	49	50
科学と現代	52	50	50
自然との共生	50	58	65
英語（計）	74	77	69
コミュニケーション英語A			75
コミュニケーション英語B			59
英語C			74
英語F（再履修科目）			74
英語S（アドバンスト科目）			92
ドイツ語	57	67	60
フランス語	71	78	72
中国語	58	63	59
朝鮮語	61	57	63
フィリピノ語	63	83	56
情報科学	46	50	56
スポーツ	77	77	80
理系基礎科目	59	64	59
日本語科目	100	96	98
平均	59	63	61



「授業時間外学習」については、『２時間以上』または『１時間以上～２時間未満』と回答した学生の割合を示した。授業科目毎に１時間以上行う学生の割合は、全科目平均で23%であった。現行の単位制度では、１単位は標準45時間（「教員が教室等で授業を行う時間」及び「学生が事前・事後に教室外において準備学習・復習を行う時間」の合計）の学修を要する教育内容をもって構成されている。そのため、授業時間外の学習時間が短いことは問題である。そのような中で、「フランス語」「日本語科目」では、40%以上の学生が１時間以上の授業時間外学習を行っている。これらの科目での課題の出し方も参考にして、学生の授業時間外学習を促していくことが必要である。

表13　設問⑬3-4　授業時間外学習
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	15		18
こころと健康	14		15
人間と文化	16	16	18
生活と制度	15	14	16
科学と現代	15	21	16
自然との共生	10	24	22
英語（計）	27	30	22
コミュニケーション英語A			17
コミュニケーション英語B			19
英語C			34
英語F（再履修科目）			28
英語S（アドバンスト科目）			27
ドイツ語	19	29	37
フランス語	38	39	40
中国語	23	25	24
朝鮮語	19	18	17
フィリピノ語	0	33	33
情報科学	11	0	14
スポーツ			
理系基礎科目	31	38	34
日本語科目	51	53	43
平均	21	26	23

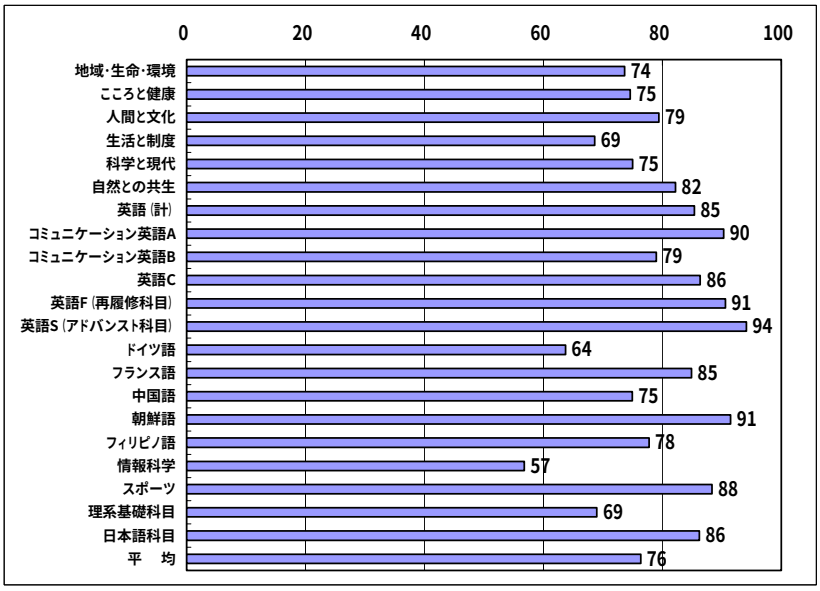


４）「授業全体に対する質問」に関する学生の評価

「授業改善度」についてだが、学生の意見を取り入れるなどして授業を改善する努力に対し、全体では76%の学生から肯定的評価を得た。ミニッツペーパーや授業中のコミュニケーションによって学生から授業の問題点を引き出し、教員がどのように問題点を認識しているのか、改善に向けてどのような対処を行うのかということを、学生に伝えることが必要であろう。学生にとって当該授業との出会いは一期一会の機会であることからすると、改善への意欲が彼ら・彼女らに伝わるよう工夫することは、教員としての責務であろう。

表14　設問⑭4-1　改善度
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	73		74
こころと健康	65		75
人間と文化	84	80	79
生活と制度	79	74	69
科学と現代	68	72	75
自然との共生	72	78	82
英語（計）	84	88	85
コミュニケーション英語A			90
コミュニケーション英語B			79
英語C			86
英語F（再履修科目）			91
英語S（アドバンスト科目）			94
ドイツ語	61	84	64
フランス語	78	91	85
中国語	69	83	75
朝鮮語	85	87	91
フィリピノ語	88	100	78
情報科学	57	100	57
スポーツ	85	87	88
理系基礎科目	69	71	69
日本語科目	86	89	86
平均	73	79	76



「目的・目標達成度」では、授業の目的・目標が達成されたかどうかを質問している。全科目平均で82%の肯定的評価を得た。科目別の結果では、全ての科目で70%を上回っている。特に「フィリピノ語」「日本語科目」は高い評価を得ている。

授業全体としての「満足度」については、全科目平均で80%の肯定的評価を得た。ただし、科目別の結果を見ると「ドイツ語」「情報科学」の評価がやや低くなっている。原因を明らかにするための深い調査が必要であろう。

共通教育のありかたを論じる場合に、いたずらに学生の反応に振り回されてはいけないが、授業は受け手に受容されない限り、効果を期待することはできない。目的・目標達成度や満足度の向上の為に、カリキュラムの面からも問題がないか、絶え間なく検証する必要がある。

表15　設問⑮4-2　目的･目標達成度
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	83		82
こころと健康	75		80
人間と文化	86	83	87
生活と制度	89	79	78
科学と現代	77	77	82
自然との共生	75	86	89
英語（計）	86	90	87
コミュニケーション英語A			92
コミュニケーション英語B			80
英語C			89
英語F（再履修科目）			90
英語S（アドバンスト科目）			98
ドイツ語	71	87	72
フランス語	83	95	90
中国語	81	89	85
朝鮮語	87	85	93
フィリピノ語	88	100	100
情報科学	77	100	70
スポーツ	95	93	93
理系基礎科目	75	78	76
日本語科目	100	100	98
平均	81	84	82

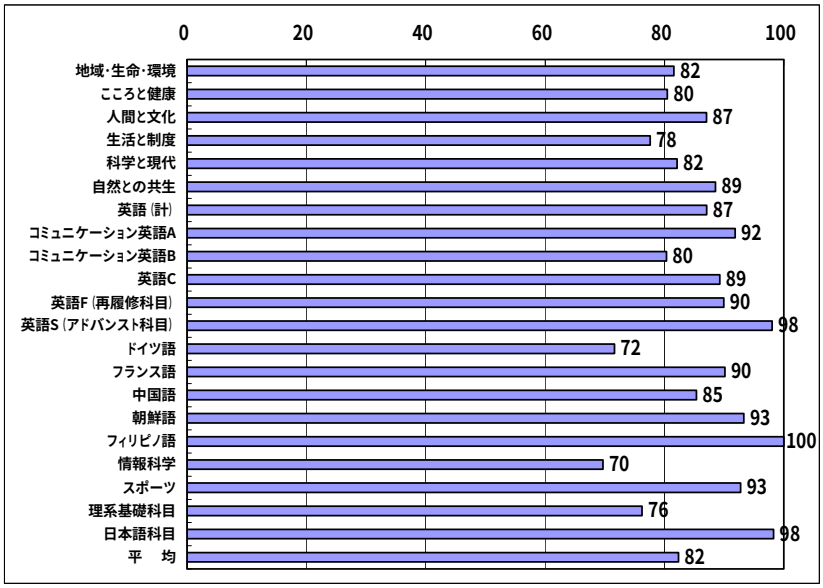
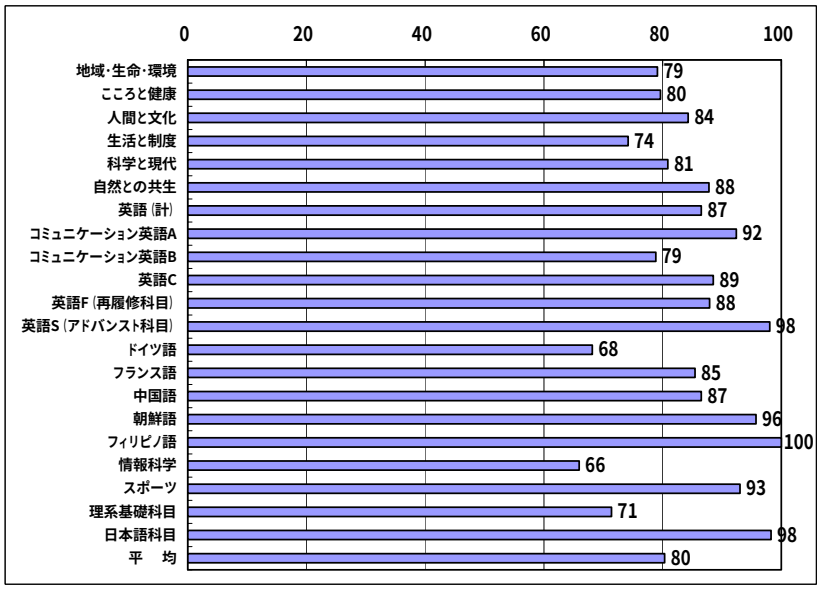


表16　設問⑯4-3　満足度
（全回答数に対するA，B評価の割合（%））

	平成18年度 前	平成18年度 後	平成19年度 前
地域・生命・環境	81		79
こころと健康	73		80
人間と文化	83	81	84
生活と制度	88	76	74
科学と現代	76	73	81
自然との共生	72	83	88
英語（計）	86	90	87
コミュニケーション英語A			92
コミュニケーション英語B			79
英語C			89
英語F（再履修科目）			88
英語S（アドバンスト科目）			98
ドイツ語	68	84	68
フランス語	84	95	85
中国語	81	89	87
朝鮮語	89	83	96
フィリピノ語	88	83	100
情報科学	73	100	66
スポーツ	94	93	93
理系基礎科目	70	73	71
日本語科目	89	100	98
平均	79	81	80